

シラーの『オルレアンの乙女』について 2.

江坂哲也

承 前

ヴォルテールとシラーの「乙女」の意味
歴史と文学作品の関係
神の声，第一の 3 種の神器
太子の仮宮殿では

第二，三の神器

カール太子の仮宮殿に入って来たのはロートリンゲン出の，名をラウールという者 (Volk) で，彼はヴォクレールの騎士ボドリクールを大将として 16 の小旗を掲げ，太子の軍に合流しようと駆けつけていた騎士の一人である。彼らはイオン川が流れる谷を下っているうちに，気がつくくと敵の大軍に前後を挟まれてしまっていた，そう彼は宮殿のお歴々に自分の身分を明かした後，あの奇跡が起こった時の状況をこう続ける。

勝つのはもちろん，逃れる望みもなく，
最も勇敢な者も気落ちし，みんな絶望して，
もう武器を投げ出そうかと思っていました。 950
隊長たちは方策を，あれこれ探り合っても，
何も出てこない， と，その時，何と，
不思議な奇跡が私たちの目の前に現れたのです。
と言うのはですね，樹木の奥から突然
兜をかぶった乙女が一人，堂々と ((die Mächtige) 現れたのです。 955
その姿は美しくも，また恐ろしくも見え，
鉄の輪をはめた彼女のうなじには

髪が降りかかり、天の栄光がその高き女を
包み輝いているように見えました。
そして彼女は声高らかに、こう言ったのです、 960
「勇敢なフランス人よ、何をためらっている、敵に掛かれ！
浜の真砂より多く、いくら敵がいようと、
神と聖なる乙女が、お前たちを率いているのだよ」。
そして、彼女は旗手の手からサッと旗を奪い取ると、
隊列の先頭に出て来て、この世の者と思われぬこの女は 965
大胆にも、歩を前に進めて行ったのです。

このラウールの台詞は、前場との関係では、前述した村人ベルトラントの報告にあった「王のもへと向かっている一人の騎士」(Vgl. 284ff.) ポドリクールに、故郷を出た乙女ヨハンナがようやく合流できたことを、そして彼女はあのジブシー女のもたらした兜をかぶり、それを神に授けられたものと確信していることを示している。当時女性の男装は禁止されていたが¹、彼女はそれ以上の出で立ちで、天の栄光に包まれて、第 961-3 詩行の言葉を発するのだから、敵味方に関係なく男どもは度肝を抜かれたであろう。ところがフランス側の兵士とイギリス同盟軍の反応は正反対で、それをこの詩行に続くラウールの台詞が簡潔かつ十分に表していよう。

私たちは驚きのあまり口もきけず、高くはためく旗と 967
それを持つ乙女に、無我夢中の様で続き、
敵を目がけて、真っすぐ突進して行ったのです。
敵の方は、ひどくうたえ動けず、目の前に現れた 970
この不思議な女に、目をパチクリさせ、
呆気にとられて見とれながら、立ちつくし、
ところが、まるで神の恐怖に襲われたかのように
突然、踵^{きびす}を返すと、
逃げ出しにかかり、防衛線も武器も自ら棄てて、 975
軍の隊列は蜘蛛の子を散らしたように、野原一面に崩れ出し、
もはや命令の言葉も、大将の叫びも何のその、
恐怖で正気を失って、振り返りもせず、
兵員も軍馬も河面目がけて、ザンプと突っ込み、
それで無抵抗のまま、殺されるという有様で、 980
それは戦いなどと呼べるものではなく、まさに屠殺でした。
2000 の敵の屍が野を覆っていましたが、
河が飲み込んだ者は、数えずにですよ、

それで我が方はと言えば、一兵も失っていませんでした。

彼女の出現に対する反応はこのように違い、太子側のポドリクールは無勢は彼女に触発され、彼女の掲げる旗に続き、敵の方は多勢にもかかわらず逃げ出したのは、太子側の軍が彼女を神の使いと言葉どおりに受け入れたのに対して、イギリスとブルグントの同盟軍の兵士が見た彼女は、後で明らかになるように、魔女のような姿であったからである。ラウールの表現している「彼女を包み輝いている天の栄光」(959)も、実際は太陽を後ろにしているだけのヨハンナで、彼女は兜をかぶっているため、その奥にある顔は見えない。声からは女と分かるが、兜を留める鉄の輪の下から髪を振り乱しているのだから、イギリス同盟軍兵士に魔女が森の中から突然現れたと錯覚されても不思議ではない。両者は同じものを見ていたのに、反応が逆になるのは、彼女が太子側のフランスに付いたからで、イングランドの連合軍は神の使いと偽称する魔女に驚き、敗走したのであろう。1802年刊の初版本は古代ローマの女神ミネルヴァの銅版画で飾られているが²、これはシラーがキリスト教徒のヨハンナを、その「戦いの神」の属性を持った異教の女神と同一視していることを示している。この女神は美しく凛とした顔を見せているが、戦場でのヨハンナは顔を守る面鎧を下ろしていたので、その顔は見えず、この神器の兜が表した力は敵味方でのように相反したものであった。ポルテールのヨハンナは聖人ディオニュースの命じた「虐殺」ではなく、少年の裸体に百合の花の絵をかき、英雄からはパンツを失敬するという悪戯を残して去ったが、シラーのヨハンナはあの彼女が選ばなかった「屠殺」の方を兜の力で実現したのである。

この先触れとして来たラウールの報告を聞くと、カール太子も含め宮中の面々は驚き、訝しがり、その乙女の素生を尋ねるが、「自分が誰であるかは、国王にだけ明かしたいと申しております」と答え、こう続ける。

彼女は予言女^{しや}であり、神が遣わされた
預言女と自称し、月が改まる前にオルレアンを 990
救うと約束しております。この言を信じ、
兵士 (Volk) は戦う意欲に燃えております。

この「兵士」と訳した原語は>Volk<で、辞書では「人民、民族、国民」という意味であるが、この兵士たちは民族意識に目覚めたフランス人民の志願兵であり、金でしか戦わない太子のスコットランド傭兵と違って、主体的・積極的に乙女に付いて行こうとしていることをラウールの台詞は表している。イングリッド・パーグマン主演のハリウッド映画「ジョアン・ダルク」では乙女と太子の接見の場を、次に後述するように、シラーに倣っているが、人民のこのようなヨハンナ人気については、これを恐れたカール太子（英語ではチャールズ<Charles>）を政治的配慮から敵側と組ませ、乙女を宗教裁判に委ねさせている。シラーにはそういう筋立てではなく、あくまで

も乙女と神々との関係、そして太子らがヨハンナの純粹性>Unschuld< (清純, 潔白) をどこまで信頼し続けられるかという問題として展開している。そういう主要な筋立ての傍流としてシラーは、イギリス支配から独立したいというフランス人民の民族的心情をヨハンナに代表させていること、そして彼女をその人民の先頭に立たせていること、そのような彼の意図を見落としてはならないだろう。

劇では暫らくするとヨハンナが到着したらしく、「乙女万歳, 救い主 (Erretterin) 万歳」と、彼女を迎え叫ぶ兵士ら大勢の声を聞き、カールは側近のあのデュ・シャテルを迎えに出し、大司教に「これをどう考えたら良いのだろうか。予を救えるのは神の腕しかないという将にこの時に、一人の少女が勝利をもたらしてくれるとは。これは自然の成り行きにはないことだ。大司教どの、予のような者がこのような奇跡を信じて良いのだろうか」(996ff.) と尋ねる。カールは明らかに神に対して自分を卑下している。あの映画ではシラーをまねて、乙女をからかって座興の種にしようとデュノワを王座に着かせるが、この劇の太子カールは一方では自然の理に通じ、他方では信心深く謙虚であるため、自分のような者に対する神のこのような配慮を信ずることができず、そうするのである。入室して来たヨハンナは、そこに座っているデュノワを見て、「オルレアンの庶子, あなたは神を試そうとするのですか」(1007f.) と叱責し、人ごみに混じって隠れている太子の前に跪く。その場に居合わせた一同はみな驚き、カールは訝しく思い、「今日が予との初対面であるのに、いつからそれが分かるようになったのか」(1010f.) と尋ねると、彼女は「あなたを見たのは、神以外の誰もあなたと会っていない所で」(1012) と答え、さらに続けて、昨夜遅くカールが神に祈っていた時の状況を語り、「人払いして下さい、そのお祈りの内容を言いましょう」(1017f.) と結ぶ。

カトリックの聴罪師は罪の告白を他言できないが、ヨハンナも神に遣わされた者として、その秘密保持の義務を守ろうとしたのであろう。ところが国王という公の任に就く者としての個人情報とは別であると考えたのか、カール太子は「天に打ち明けたことを、人前に隠す必要など感じない。予の祈りの内容を皆に言ってみる、そうすれば神がお前を霊で満たしていることを、もう疑いはしないから」と勧めると、

ヨハンナ：あなたのお祈りは三つでございました。 1022

(中略)

この王冠に不正な富がまつわりついていて、 1225

あるいは他に私の祖先の時代からの重い罪が
まだ償われていず、そのためこのように悲惨な
戦争が呼び起こされているのでしたら、

民 (Volk) に代わって私を、犠牲にお取り下さるように、

そして、あなた (神) のお怒りのすべてを 1030

ことごとく私の頭上に落として下さるように、

カール：驚きのあまり、後ずさりして

お前は誰だ、この世のものとは思われぬ。どこから来たのか。

(一同は彼女に恐れをなす)

ヨハンナ：あなたは第二の願いをこうなさいました。

あなた(神)のご決定とご意思が

この王笏を私の家系からもぎ取り、 1035

ご先祖である歴代国王がこの帝国に所有したもの

すべてをお取り上げになるということでも、

三つの宝だけはどうか私のもとにお残し下さいませ、あなたは

そう神に懇願され、満ち足りた胸(Brust)と友の心(Herz)

そして我がアグネスの愛(Liebe)の三つを挙げられました。 1040

(国王は顔を隠し、激しく泣き出し、列席の者一同には

恐れあまり大きな動揺が起こる。)

あなたの第三のお祈りを続けて言いませんか。

この「友」(1039)は「1」(「シラーの『オルレアン乙女』について1.」,以下同)で述べたデュ・シャテルを指している。先述したように、彼は戦中のこととはいえブルグント公の父を殺していたため、その私的仇を討とうとイギリスと同盟しているその公と和解できるように、その障害となっている自分を犠牲として差し出してくれと、カールに申し出ている。それを太子は「友の命と引き換えに助かろうとは思わない」と(Vgl. 895ff.)と拒絶していた。主従を乗り越え、友情で結ばれる人間関係は啓蒙主義の一つの理想であり、それをシラーは『ドム・カルロス』(Dom Karlos, 1787)や『人質』(Die Bürgschaft, 1799)などで主要なテーマとして扱ってきたが、ここでもそれをこのような形でそっと挿入し、欲望のままに新しい男を求める王妃イザボとは対称的に、この「友の心」と一人の女の「愛」に満足し、足ることを知る「胸」を持てるようにと、カールに祈らせている。カールはヨハンナの口から第三の内容を聞くまでもなく、あのクレルモンの尼が予言した女は母イザボでも、愛人アグネス・ソレルでもなく、まさにこの乙女で、このヨハンナこそが「最高の神の遣い」(1043)と信ずる。このように人民を慈しみ、公明正大で平等な人間関係を築こうとする啓蒙的な太子であるがゆえ、神はカールに乙女を遣わしたのである。

ヨハンナは尋ねられた自分の素性を「ドム・レミ(Dom Remi, ママ)の羊飼いの末娘」(1048f.)と明かした後に、子どもの頃から聞かされて来た百年戦争でのイギリス人(Volk)の意図と思惑をこう語る。

外国の島国民族(Volk)が海を越えて

やって来ましたが、その目的は私たちを奴隷にすること、

そして私たちと生国が違い、私たちなど愛しようとしめない 1055
外国の支配者を押し付けること、
そして彼らはすでに最大の都市パリを占拠し、
この帝国すべてを我がものにしたと思い込んでいます。

そして彼女はイエズスの聖母マリーアに「外国による不名誉な束縛から私たちを解放し、私たちの国の王様をお守りください」(1060f.)と、村はずれにある「聖なる榿の木」(eine heilige Eiche, 1065)の下で、あの聖母像に向かって祈り続けると、太子も大司教もいる宮中の面々の前で話す。聖母にこのように祈っている彼女の胸にイギリスに対する恐怖と憤怒という感情が渦巻いていたことは明らかであるが、この榿の大木は、拙論「1」で述べたように、彼女の父親ティボによれば、村の古老が恐れる悪霊の宿る木であるが、彼女はそれを「聖なる」木と表現し、さらに「多くの奇跡を恵む力で有名」(1066)と付け加えている。そして彼女がその大木の下で昼寝をしていると、「迷子になった子羊が夢の中に出て来て」(1070)、その居場所を知ったという体験例まで挙げている。これが後に、第4幕第8場の父親ティボの登場により大問題になるのだが、ここでは異端に対して最も敏感であるべき大司教ですら、この点について何の台詞も割り当てられていない。ここにこそシラーの意図が隠されているのであって、彼は真の神とは何か、聖女と魔女の違いは何かという問題を狭い宗教裁判の法廷にではなく、中世のフランスを舞台にして、侵略者のイギリス人も含めて色々な立場と状況にある登場人物がそれぞれ判断し、同時に自己展開・発展するように仕向けているのであろう。ところで、この劇の舞台は15世紀で、当時はこの「榿の木」のような様々な迷信に満ちていた時代であり、その土壌の中から聖女か魔女かというジャン・ダルクの宗教裁判は生まれたのだが、これこそが最大の迷信であろう。

ヨハンナは続けて、聖母マリーアとの出会いを宮廷の面々を前にこう語る。

私が夜長ずっと敬虔な (fromm) 気持ちで、この木の下に
座って、眠気をこらえていますと、突然
その聖なるお方が私に向かって来られ、剣と 1075
旗をお持ちでしたが、他の身なりは私と同じ
羊飼いの衣をまとっておられ、私にこう話しかけられました。
「私ですよ。ヨハンナ、立ちなさい。(羊の)群れは放っておきなさい。
あなたを主が他の仕事に呼ばれているのですよ。
この旗を取り、この剣を腰に着けなさい。 1080
これで私の民 (Volk, 民族) の敵を根絶やしにし、
あなたの王様 (Herren) の息子をランスにお連れし、
彼の頭に王冠をかぶせなさい」。

この宮中の場ではあの兜の件は出て来ない、これは注目に値しよう。ところで、聖母のこのよ
うな命に、「か弱き女 (Magd)」(1085) などに戦いなんて、とて、とヨハンナが応えと、

「清き乙女 (Jungfrau) が
この世の (irdisch) 愛をはねつけば、
どのような栄光でも成し遂げられるのですよ、
私をご覧なさい。今のお前のように清純な (keusch) 1090
女 (Magd) だった私は主を、天の主を (den göttlichen) お産みして、
私自身も神的に (göttlich) なっているのですよ」。

ヨハンナが見上げると、天には「白百合」(1095) を手にした天使で満ちみちていた。この花
はこのヴァルワ王家の紋章で、前の第 1081 詩行にあったように、聖母はフランス側についてい
る。ユダヤ民族と契約 (Testament) を結んだ神が乙女マリアに受胎告知し、この彼女の胎内
で神の子は受肉 (Inkarnation) し、人間の姿をまとして生まれ、イエズスと名付けられ、民族
の枠を越えた新しい教えを広め、人間一般を受け入れる新しい契約を結んで、自ら人間の罪を背
負って十字架上で犠牲になり、その 3 日後に復活し、再び父なる神のもとに帰って行った。それ
ゆえキリスト教はユダヤ人 (Volk, 民族) から生まれたが、人間一般の世界宗教となり、その
経典は前の旧約に対して新約聖書 (Testament) と呼ばれるようになる。しかし先述したように、
シラーはこの神をフランス民族の神として登場させている。

啓蒙主義の洗礼を受け、カール学院でフランスの機械論的に人間を見る医学を学んだシラーは、
少なくとも檜の木への迷信に対しては彼女の迷妄と考えていたであろう。しかし、そこでヨハンナ
の見た夢が迷子の子羊の居場所を教えてくれたというのは偶然であるとしても、これが彼女の実
体験に裏打ちされると、単なる偶然を越えたものになるということもシラーは十分承知していた
であろう。もちろんそこから伝説とか迷信というものが生まれたのであるが、彼女が世界史に登
場した中世ではそういうものが混在し、シラーが彼女を主人公としたこの作品を創作している近
代でも、カトリックの国フランスには聖人伝説が根強く残っていた。「1」で先述したように、啓
蒙主義者ヴォルテールはそういう伝説を茶化して、聖人ディオニュースを乙女の案内人として登
場させている点に窺えよう。さらに史実ではジャン・ダルクに初めて声をかけたのは大天使ミカ
エル、そして聖女カタリーナとマルガレーテが挙げられているが³、シラーはそれを聖母マリア
に絞っている。もちろん彼女もカトリックにより聖女とされた一人であるが、乙女ヨハンナは
彼女を通して神の命と一対一で向き合っていることを見逃してはならない。ドイツでは教皇が聖
ペーター教会の建造に費やした借金返済のため発売した免罪符に反対して始まったルターの宗教
改革により、教皇制も宗教会議も人為的なもので、間違いを犯すことがあると否定され、重要な
のは個々人が主体的に神に向い、罪を懺悔し、反省するという直接的関係を重視したことである。
そしてシラーの家庭ではそのプロテスタントの中でも特に敬虔の感情を重視し、隣人愛を実践的

にるように説く敬虔主義 (Pietismus) が信じられていた。この「敬虔」の語源はラテン語の「ピエタス」(pietas) で、ドイツ語では>Frömmigkeit< (敬虔) となる。これは第 1073 詩行で「敬虔な (fromm) 気持ちで」祈っているヨハンナとまさに一致しよう。

ところで前述したように、シラーは『人間機械論』の影響を受けたフランス医学を学んだ。これに従えば聖母マリアが現れたというのも、「眠気をこらえていますと」(1075) と、シラーがヨハンナに自らの肉体的極限状態を説明させていることを考慮すると、それもこの肉体が作り出した幻想とも解釈されよう。ところがシラーはその機械論を完全には受け容れなかったことも注意しなければならない。人間が五感などを通じた外界の作用に機械的に反応するだけでは、人間の自由や道徳性という主体的なものが危機に瀕するとして、彼は外界と頭脳の間にある「魂」(Seele) をその主導権争いの場と考えた。それはカール学院の医学生であったシラーであるが、この劇を創作している彼はその点で聖母マリアとヨハンナの関係をどう展開させるのであろうか。

問題は彼女の敬虔な感情で祈った主体的な願望と、それに応えて出現した聖母マリアの課した新しい「仕事」(Berufung) の関係である。彼女の主体的な願いは外国の奴隷状態からのフランス解放と、それを成し遂げるべきフランス人国王の守護であり、そして神のそれに対する命は、端的に言えば「自分の力でそれを成せ」ということである。つまり、田舎<女>であるヨハンナが<ヒロイン>となって、民族・人民の王 (Volkskönig) を創れ、とすることである。その際の条件は地上的な愛に感応する自分の<女 (das weibliche)>を捨てるということである。それで彼女の主観的願望は<神の (göttlich)>命と一致し、彼女はそれを神に対して敬虔に (fromm)、そして神に守られ英雄的に (heroisch) 実行できるという訳である。ところでこの彼女の向こう側にいる聖母マリアは実在していたのかどうか、彼女の精神的・肉体的状態が作り出した単なる妄想ではないか、そういう疑問が当然起こって来ようが、シラーは彼女にあの榎の木も兜の件さえも純真に受け入れさせている。これはこの劇の舞台が啓蒙主義以前の中世に設定されているからであろうか。

さて劇の筋に戻るとして、聖母マリアは続けて姿を現わし、三夜目には立腹気味に、躊躇しているヨハンナをこう叱り、

「服従は女のこの世での義務ですよ、
かんばんしんく
艱難辛苦が女の厳しい定めなのです。

きつい勤めを果たして、女は清められねばならず、
この世で仕えた女は、天で偉大となるのですよ」。 1105

そうおっしゃりながら、羊飼いの
衣服をはらりとお脱ぎになり、天の女王として
陽光に包まれ輝きながら、すっくとお立ちになり、
それから金色の雲に乗り、上へうえへと、

至福の国へと消えて行かれたのです。 1110

(一同感動し、アグネス・ソレルは涙を流しながら、
顔を国王の胸に埋める)

マリーアは地上の愛ではない天上のそれでイエズスを身ごもり、苦しさを耐え忍んで産み、この世で育て、あの世に行った。その彼女が同じ女性であるヨハンナに、地上で後生を産み育てるための愛を捨て、戦場に赴き、生身のイギリス人を殺戮せよという天命を告げ、そういう「艱難辛苦」(1103)を要求し、天に消えて行った訳である。

ヨハンナの台詞を直に聞いた太子の愛人ソレルの感激した反応はト書きにあり、その他三様のそれがこう続く。

大司教：このように神が証明して下さったのだから、
この世の小賢しさで、いかなる疑念も差し挟んではならぬわ。
その事実 (Tat) が、彼女は真理を話していることを示し、
ただ神のみがそのような奇跡を起こすことができるのだ。

デュノワ：そんな奇跡は信じないが、彼女の眼を見れば明らかだ、 1115
その顔には純真さ (Unschuld) だけが見えるわ。

カール：罪深きわしのような者が、このような恩寵に値するとは！
欺かれることなく、すべてを探れる目で、お前は
わしの心の内を見抜き、わしの謙虚さを知っておるのであろう。

ヨハンナ：高きお方の謙虚さはあの天では光り輝くのです、 1120
へりくだられていたからこそ、神はあなたを高められたのです。

大司教はその話を信じ切り感激しているが、父オルレアン公が愛人に産ませた子である庶子のデュノワは女性を見分ける壺を心得ているため、彼女の口ではなく眼で判断し、太子は自分のような者に神が助けを遣わせてくれたことに感激している。シラーはこのように集団の中の個々人の個性を的確に描き出す才能を持っている。それはともかくとして、シノンの仮宮殿を捨てて逃げようとしていた太子はこれで強い味方を得、支配者としてフランスの独立を回復するという任務へと、そして乙女の願いと神の命は民族主義という点で一致した積極的な行動へと移行することになる。乙女の後ろには神がついていると確信した面々はオルレアンの解放とランスへの進軍へと息まき、デュノワは乙女を軍の先頭に立てて導いてもらい、その彼女を自分の剣で守って見せると豪語し、ラ・イールがそれに同調すると、兵士たちは武器を打ち鳴らし呼応する。カールはヨハンナに自分の軍を率いてくれと、元帥が返してきた「統帥権」(die höchste Kriegsgewalt, 1138)を表す剣を彼女に授けようとするが、彼女はそれを断り、

そうはまいりません，太子様！

この世での権力を表すこんな道具で，
我が君に勝利はもたらされません．私は
他の剣を知っております．それによって私は勝利するのです． 1145
私にあの聖霊（Geist）が教えてくれた通り，あなたに
申しますから，人をやって，それを取って来させて下さい．

（中略）

その中に私が使うように言われた剣があります． 1152
刃には三輪の金の百合が掘り込まれていますから
それでそれと知られましょう．

（中略）

さらに白い旗を私に持たせて下さい． 1157
それは赤紫（Purpur）で縁取り，この旗には
可愛い子どものイエズスを抱いた
天の女王が地球の上に浮かんでいる様を
描いてもらわねばなりません，

これで第二の神器としてヴァロワ家の紋章を刻印した剣，「1」で述べたように歴史上の乙女の旗にあったのは「イエズス・マリーア」という文字と王家の百合であったが⁴，この百合は第二の剣に移され，そしてこの文字は聖母子像の絵に変えられて，教皇にのみ許される赤紫色で縁取られた第三の神器の旗に描かれ，あの兜を加えて三種のそれが揃った訳である．出陣しようとしている所に，オルレアンからイギリス側の使者が来て，もう陥落寸前なのだから，こちらの総攻撃によりこれ以上血を流さないよう和議に応ずるよう申し込んできた．乙女はここでも神通力を発揮し，彼を派遣した將軍ソールズベリ伯は彼の出発後オルレアン側の弾に当たり死んだと言い，遠く離れた市のことを私が知っていることが信じられなければ，帰って自分の目で確かめると付け加える．そして逆に私の言うことをそちらの將軍たちに伝えると命じ，

イギリス国王，そしてこの国をその幼君に代わって
支配するお前たちベッドフォードとグロースター公よ，
天にまします王に，汝らが流してきた血の申し開きをせよ． 1210
お前たちが神の法に反して征服した
都市の鍵はすべて返還せよ．
乙女の私は天の王の命で，お前たちに和平か
血に染まる戦いを与えに行くから，その
どちらかを選べ．私がそう言うのは，お前たちに 1215

次のことを知らしめんが為である．この美しいフランスは
マリーアの御子によりお前たちに
授けられているのではない， 私の主人
カール太子に神が与えられているのだ．
彼は国王に相応しく，彼の国の諸侯すべてを 1220
従えて，パリにお入りになるであろう．

さあ使いの方，さっさと急いで立ち去りなさい，
さもないと，お前がイギリスの陣営に着き，
この使いの任を果たす前に，この乙女がオルレアンに
到達し，勝利の旗をそこに立ててしまうわよ． 1225

ここで第一幕は終わっているが，乙女は太子のフランス軍を率いてオルレアンに向い，激戦の末その市を解放した．

魔女の出現

この作品にシラーは『オルレアン乙女』とタイトルを付けているが，ヨハンナのそこでの英雄的な戦いは省かれ，この第二幕が開くと，イギリス側の陣営でその敗因分析が始まり，その中でその戦いの様子が語られる．イギリス軍の総大将トルボトは兵士どもが恐怖に陥り，逃げ出したためと分析し，彼らが安心して再結集できるように，高い岩に囲まれている安全な地に陣の設営を命じ，見張りを立て，

夜だから敵も追撃できず，我らは安全ということだ，
それに羽をあいつらが持っている訳でもないから，
奇襲などの恐れはない． それでも
用心だけは必要だ，何といっても相手には大胆な
敵 (Feind) が一人いるし，それにこちらはやられた方だからな． 1235
ライオネル：やられたなどと，総大将，二度と言わないでください．
フランス人にイギリス人が背を見せた
今日のことなど，思い出したくもない．

ああ，オルレアン，オルレアン，お前は我らが名声の墓場だ！
(中略)
(連戦連勝の) 勝者が女 (Weib) 一匹に追っ払われたとは！ 1244
ブルグント：それがせめてもの慰めだ．我らは人間に
ではなく，あの悪魔 (Teufel) に負かされたのだからな．

- トルボト：その悪魔とは我らの愚かさだったのでは、ブルグント殿？
下賤（Pöbel）の幽霊（Gespenst）に、上の者たちも恐れをなしているのでは？
迷信（Aberglaube）というもので貴殿の臆病を隠しても、すぐに
ばれまずぞ。 貴殿の兵（Völker）が最初に逃げたのですぞ。 1250
- ブルグント：誰も立ち向かわなかったぞ。そちらも逃げたではないか。
トルボト：いや、その始まりは貴殿の軍翼^{よぐ}からだったぞ。
貴殿が我が陣営に飛び込んで来て、こう叫んだのだ、
「地獄が開き、サタンがフランス側について戦っているぞ」、
それで我が方は混乱に陥ったのだ。 1255
- ライオネル：貴殿に否定はできませんまい。貴殿の翼が先に
戦線を離れたのだ。
ブルグント：そこが最初に攻撃されたからだ。
トルボト：あの娘っ子（Mädchen）は我らが陣営の弱点を知っていたのだ、
どこを突けば、恐れをなすかが分かっていたのだ。
ブルグント：何と、ブルグント勢にこの不運の責任を負わせる気か。 1260
- ライオネル：我らイギリス勢は、我らだけだったら、
神に誓って、オルレアンを失うことはなかったであろう。
ブルグント：いや、オルレアンを目にもできなっただろう。

ここでも三者が対照的に生き生きと描かれている。トルボトは史実のイギリス軍総大将、ライオネルはその副官としてシラーに挿入された架空の人物、そしてこの外国側と同盟を結び太子に対抗するフランスのブルグント公爵で、この内容はこの三人による参謀会議であろう。英仏の同盟軍はオルレアンを包囲し、陥落寸前にまで追い詰めていたのに乙女ヨハンナの率いる太子軍に敗れてしまった、その敗因分析である。トルボトの「敵一人」（1235）という言葉、ライオネルの「女一匹に追っ払われた」（1244）という台詞、そしてブルグントの「あの悪魔に負かされた」（1246）という言い訳み言葉、これらは乙女一人に負かされたという点では一致しているが、「敵」から「女」（この原語は男性でも女性でもない中性名詞で、それゆえ軽蔑の意味が付く）、そして最後には「悪魔」にまでされている。この言葉の変遷に伴い敗因分析がされ、どちらが先に逃げたのが焦点になり、ブルグントとイギリスの同盟に亀裂が生じる。それがこの劇の次の展開になるのだが、ここで重要な2点を見逃してはならないだろう。

その一つはトルボトの台詞にある「迷信」（1249）の問題で、彼はもちろんライオネルも「敵」と「女」という言葉が示しているように悪魔など信じていない。彼らはそれを下々の妄想だと知っているし、ブルグント公もそうであろう。しかし軍隊の大部分を占める兵隊たち、これは原語では単数形の>Volk<で、彼らは貴族や聖職者の支配階級ではなく、ヨハンナが生まれ育ったドンレミ村の民のような農民などで、その原語は「人民」と訳される。彼らはそれゆえ「人民出の兵

隊」で、これがトルボトの台詞では「下賤」(1248)と表現されている。支配階級は教育を受け、文字の読み書きができるが、被支配階級の大部分はそれとは無縁であった。もちろんシラーには後の19から20世紀に重要な概念となる「階級」(Klasse)という認識はなかったが、啓蒙主義の任務は人間一般を無知・迷妄から解放し、個人的自立を促すことであった。この劇の舞台は中世であるが、この点ではシラーの時代も(そして現代も)過渡期で、トルボトにそう言われても仕方がない状態であった。シラーはヨハンナを主人公にこの劇を創作し、舞台という教育施設から啓蒙を試みていると言えようが、とにかくこの舞台は中世で、無教育で迷信を信じていた兵隊が自ら作り出した「幽霊」(1248)でも、皆がそう信じて逃げ出せば、教養あるブルグント公でも集団心理に流され、「地獄が開き、サタンがフランス側について戦っているぞ」(1254)と叫び、イギリス陣地に知らせに飛び込んで来たということであろう。

もう一つの問題は民族主義である。トルボトの1258詩行の台詞にあったように、この乙女は彼ら同盟軍の「弱点」(Blöse, 1258)、つまりどちらの陣営が容易に戦意を喪失するかを知っていた。既にラウールの口から報告された第961-3詩行の乙女の台詞は、フランス民族に肩入れする神が彼女を遣わし、その彼女が無勢の軍を率いるというものであったが、今回のオルレアン解放に際してはそれ以上で、彼女はあの兜で顔を隠しているだけではなく、あの剣と旗を手にして太子の正規軍を率いていた。そして恐らく彼女はブルグントのフランス人を前にして、「フランスの方々(Völker)よ、神はイギリス人をやっつけるよう私を遣わされ、太子の側に神は付いておられる。フランス人同士で戦うのは神の命に反する・・・」と呼びかけたのであろう。先王は精神を患っていたがフランス人の王で、その血筋から言えば正当な後継者はカール太子であるのに、まだ子どものイギリス国王を頂き、しかもその異国軍と組んで自分達と同じフランス人民の町を襲ってきた、このことにブルグント公も含めて内心忸怩たるものがあつたであろう。そういう彼らに突然あのような呼びかけがあり、しかもその乙女が、ラウールのあの報告にあつたように、太陽を背に、あの兜をかぶり髪を振り乱していたら、それを迷信深い兵隊たちが魔女と思い込んで不思議はないだろう。この民族的「弱点」をシラーは次の第9場まで取って置き、ここでは「魔女」が初めて登場し、同盟軍に亀裂が生じることに焦点を合わせている。しかもこの場では、この「弱点」は迷信を信ずる「愚かさ」(Narrheit, 1247)に収斂され、他国への侵略とか異民族による支配という内実は隠されている。

さて劇の筋に戻るとして、先の引用はブルグントの「オルレアンを目にもできなつただろう」(1263)で終わっていたが、これは異国に侵入した彼らを彼が手引きしなかったら、その市まで辿りつけなかったらと言うことで、双方ともこれまでの色々な過去のことで持ち出して非難し合い、同盟の亀裂を深めて行く。太子が母イザボヤブルグントとの和解を求めて、ラ・イールを遣いに出していたことは前述した。このことを察知していたイギリス側はそれをここに持ち出して、疑心を彼にぶつけると、

ブルグント：それ以上はよせ、後悔することになるぞ。

わしは我が君の正規軍旗に背を向け、
わが身に裏切り者の汚名を招いてしまったが、 1290
それがよそ者からこのような侮辱を受けるとは！

なんでわしがここに居て、フランスと (gegen) 戦うのか。
こんな忘恩の輩に仕えさせられるより、
生まれながらのフランスの王にそうしたいわ。

トルボト：貴殿は太子と交渉しておられる、 1295
それは知っているぞ。我らは裏切りから
身を守る術^{すべ}ぐらいは心得ておるぞ。

ブルグント： 地獄に堕ちろ！
そんな風にわしを思ってたのか。 シャティヨン！
兵 (Völker) に出発の用意をさせる、
領^{くに}地に帰るぞ。(シャティヨン退場) 1300

ライオネル：道中ご無事で！
(中略)

フランスと 1305
イギリスの血は所詮混じり合えないということだ。

これで同盟は決裂した、そう思われた所に王妃イザボが登場し、その取り成しをする。彼女はこの喧嘩の原因を、「地獄のまやかしに我らは合戦で散々やられたが、今なおそれがここで正気を狂わせ続けているのか」(1321f.)と、「魔女」に帰している。この「まやかし」(Gaukelkunst)という言葉が示すように、この王妃も魔女とか地獄など信じていない。そしてイギリスの総大将トルボトには、「イギリス人が皆こぞって、この国の海岸に押し寄せようとも、この国が一致団結していれば、征服し切れるものではないわい。フランスだけがフランスを治められたのだ」(1331f.)と説き、ブルグント公には、あの太子カールに父を殺されたという過去の私怨を思い出させ、その仇打ちがもう少しで果たせられるのに、その味方になってくれるイギリスとの同盟をぶち壊そうとするのかと諫める。このように前者には異民族支配の難しさを説き、国際協調を促し、後者には私怨を強調し、インターナショナルな協調を彼女は勧めるが、これこそ自らの私怨を隠しての「まやかし」ではないだろうか。しかし、とにかくこの調停は成功し、ブルグントとトルボトとの異民族同士の同盟は修復される。ライオネルは「この和睦におめでとうさん、姦婦が結んだものだからな」(1368)と皮肉を込めた独白を漏らし、間もなく彼女の「まやかし」の皮がはがされる。

イザボ：我らはこの一戦を失い、運は
我らについていなかった、だがな、大将がた、 1370

貴殿らの騎士を意気消沈させないようにな。
 あの太子 (Dauphin) は天の守護に絶望し、
 サタンの術に助けを求めているわ。
 だがな、悪魔に自らを委ねても無駄というもの、
 あの地獄の女に奴を助け出せはしないわ。 1375
 勝運の憑いた娘っ子が敵の軍を率いているなら、
 わしがお前たちのを率いてやろう。あの乙女のように、
 わしがお前たちの預言者になってやろう。

この引用の最後の3詩行は「1」でも引用した繰り返しであるが、それはこの「2」と繋げるためである。ここで重要なのは、太子に対するその母である王妃イザボの内心である。フランス太子の仮宮殿で人々はカールを国王と呼んでいたが、乙女は彼を、神の前でつまりランスの教会で戴冠式を挙げていないため、「太子 (Dauphin, ドフェン)」と呼んでいた。このイザボも彼を原語にあるように「ドフェン」呼ばわりしているが、「1」でのべたように、イギリスの幼い王がフランス国王としてパリで既に戴冠しているので、カールは太子のままではないと言わなければならないということだけではない。「1」で述べたように彼女はカールを「気違い親父の生まれ損ないの息子」(736)と呼び、息子憎しで凝り固まっているのは、カールが母の性癖を咎めたからである。そして、この場でもそういう彼女の「軍を率いる」という申し出に対して、ライオネルが「ご婦人、パリにお帰りを・・・」(1379)と拒絶すると、他の2人もそれに続く。

イザボ：お前たちは、仲直りさせてやったら
 今度は一緒になって、わしに齒向かって来るのか。 1390
 トルボト：お帰りを、おさらばです。あなたが居なくなれば、
 我らはどんな悪魔も、もう恐れなどしないですむ。
 イザボ：わしはお前たちの同盟者ではないか。
 お前たちとわしの大事は、同じでないのか。
 トルボト：その通り、違いますな。私どもは 1395
 名誉をかけて善い戦いをしていますのでな。
 ブルグント：私は父の血を流させた仇を討つので、
 孝行息子の義務が、私の刀を聖なるものにしてくれます。
 トルボト：直ちにお発ちを。あんたが太子にしていることは
 人間的でもなく、神の目から見ても正しくない。 1400
 イザボ：あいつの血筋は10代まで呪われるがよい、
 あいつは母の頭にお説教を垂れおったわい。
 ブルグント：それは父と夫のための復讐だったのだ。

イザボ：奴は道徳裁判官としてわしに迫って来たわい。

ライオネル：そりゃ、息子さんとしては失礼千万ですな。 1405

イザボ：わしを奴は追放しおった。

トルボト：民衆の声を実行したまでだ。

シラーはイギリス人を狭い民族主義で創作していない。トルボトとライオネルもイザボの太子に対する憎しみを不当と批判し、そしてブルグント公もそうしている。あの初めての敗戦の分析で、両者が同盟解消にまで喧嘩をエスカレートさせ、ライオネルに「フランスとイギリスの血は所詮混じり合えない」(1304f.)とまで言わせたのは、彼らに共通する騎士・軍人としての誇りであり、それが極端化して高慢にまでなった表現があこの台詞であろう。シラーのこの劇ではその高慢が大きなテーマの一つとして問題とされているが、高位にある太子が「謙虚」(1120)であったのに対して、このイザボは高慢である。そして彼女は自分の性癖を満たすため、このイギリス人ライオネルを所望し、それを彼自身の口から軽蔑を含んだ言葉で拒否されると、「お前三人にお似合いなのは刀の振りまわしぐらいだ。フランス人同士だけでしか品の良い愛の語らいはできないわ」(1459f.)と捨て台詞を吐き、この陣営から追っ払われる。彼女の言うように戦場で軍人の誇りだけをかけ、刀を振り回すのは馬鹿げているかも知れないが、彼女のように権力を最も親密な男女間の愛にまで使うのは乱用であり、高慢というものである。

この高慢な女を追い払った後、軍議はこう決する、あの乙女が惑わず恐怖に陥らなければ必勝だ、夜には敵も行軍できないだろうから、ぐっすり寝て明日のために備えようと。これは知的で理性的な判断と言えよう。ところが次の第4場で乙女ヨハンナはその裏をかく。夜の闇を利用して、トルボトが高い岩山に囲まれているから安全と考えた陣内に、彼女は少数の供の者を率いて侵入し、その間に大隊をその岩山に肅々と進軍させ、敵陣を囲わせ、そして頃合いを見て、供の者に武器を打ち鳴らさせながら、「神と乙女の参上だ」(1501f.)と大声で叫ばせる。敵の見張りはそれで驚愕し、「敵だ、敵衆、敵襲だ」(1502)と叫び続け、彼女がさらに敵陣営のあちこちに火を放たせると、敵兵はこれでまた蜘蛛の子が散らされたように逃げ惑うことになる。彼女が戦いに加わりとうとすると、デュノワとラ・イールはそれを止めて、危険な戦闘は我らに任せて、旗を持ち、指揮をするだけにしてくれと頼むが、

ヨハンナ：危険な所がヨハンナの居場所なのです。

今日ここで私が戦死するようなことはありません、 1520

王の頭に冠が載るのを私は見るよう定められているからで、

神が命じられたことを終えるまでは、

どんな敵もこの命を奪うことなどできないのです。(彼女、退場)

二人は彼女を守ろうと、後を追って退場し、第5場が変わる。イギリス兵は「陣のど真ん中に」

(1526) 突然出現した乙女に驚き、「悪魔が助けて、空から」(1528) 飛んで来たという妄想が作り出され、陣営内は流言飛語に満ち、このイギリス同盟軍の兵は相争って逃げて行く。そこにトルボトが登場し、彼は先述の場ではブルグントの兵が先に逃げたと批判していたが、その彼が今は自国イギリスの兵の同じ無様さを見せつけられ、

きゃつらは聞く耳を持たぬ 止ろうともしない。 1530

上官に服従という軍律など、吹っ飛んでしまった。
地獄から劫罰の亡者がどっと逃げ出すかのように、
妄想 (Taumelwahn) にかかれ、理性を失い (gehirnlos)
臆病も勇者も皆そろって落ち行くとは！

雪崩のように波打って、勢いを増しながら 1535

押し寄せる敵に、わずかな手勢もなく、これでは
俺も立ち向かえられるものではないわ。

俺一人がまともで、周りはどいつもこいつも
熱病に冒され、駆られているとしか思えんわ。

我らが 20 回戦い、すべて打ち負かしてきた 1540

フランスの腰抜けどもを前にして、逃げるとは！
この女は何者だ、こいつはじゃじゃ馬なのか、
戦運を一気に逆転させ、

臆病鹿のようにおずおずしていたフランス軍を
ライオンの群れに変えてしまう驚愕の女神か。 1545

女傑の役を教えられ、演じているだけのまやかし女が
真の英雄たちを恐怖に陥らせるとは。

女一匹に俺の勝利の名声が地に落されてたまるか！

兵士：(駆け込みながら) 乙女だ！大将、お逃げを！

トルボト：(彼を突き刺し) お前こそ、地獄まで 1550

逃げる。俺の前で怖いかぬかし、臆病風を吹かせて
逃げる奴には、この剣で風穴を開けてやるわ。(退場)

トルボトは啓蒙主義を経て来た理性的な軍人である。彼はヨハンナを太子側の軍師などに教えられ、女傑の役を演じていると見なしているが、神の遣いだとは思えない。ところが「理性を失った」(原文では、1535) 周りの兵は彼女を魔女と思いつき、逃げ惑う。そんな一兵を軍律に従って処分し、皆をそれに服するよう罰を下した訳である。

人間モントゴメリの声と神々の声

この場はそれを見ていた一人のイギリス兵士モントゴメリの次の独白で始まり、これまで他人の口から紹介されていた戦場での彼女の姿と心情が直接舞台上で示される場に繋がる。

モントゴメリ：どこへ逃げたら良いだろう。敵と死で周りは
困まっている。こっちでは憤激した大将が刀を振りかざして、
逃亡を遮り、死地に向かうよう駆り立てている。
あっちではあの恐ろしい女が激情の火玉のように 1555
暴れまわり、死体の山を作っている。見回しても、
隠してくれるような茂みも、安全なちょっとした穴もない。
ああ、船で海を越えて、こんな所へ来るんじゃないかった。
俺は運が悪かった。空しい妄想 (Wahn) に魅惑され、 1560
フランスとの戦争で手柄でもと、やって来たが、運命に導かれ、
この血みどろの合戦で破滅寸前とは はるか彼方に
故郷のセヴァン川の花咲く岸に、父の安全な家にいたらなあ。
そこに心配していた母を、可愛い許婚も残して来てしまったのだ。

そこにあの乙女が現れ、彼はその姿を見、睨まれると、足が動かなくなってしまう。彼は近づいて来る彼女に恐れをなし、彼女の「膝にしがみつき、涙ながら命乞いを頼んでみよう。あれも女だ、ひょっとしたらあの心を和らげられるかも」(1577f.)と淡い期待を寄せるが、彼女はあつと言う間にやって来て、「さあ、死の覚悟を！お前はイギリスの母が産んだのだからな」(1580)と迫る。彼は剣も楯も捨て、足もとにひれ伏して、父は50村の領主だから、きっと「身代金」(1584)を払ってくれるからと、命乞いを始める。乙女はそれを、「この剣で生ある者すべてを殺すという契約 (Vertrag)」(1600f.)を神と結んでいるから駄目だと、拒否する。彼は「あなたも女性で温和な優しさというものをお持ちでしょう、お願いですから、どうか私の若さを憐れんで下さい」(1606f.)と懇願すると、彼女は「私の性 (Geschlecht) などに懇願するんじゃない。私を女と呼ぶんじゃない、私は現世風に異性を求めなどしない肉体のない霊と同じで、人間の類 (Geschlecht der Menschen) などではなく、この甲冑の下に心などないわ」(1608ff.)と、はねつける。ここで重要なのは、モントゴメリは楯と剣は捨てたが、兜も甲冑も身につけていること、ヨハンナもあの兜をかぶり、手には民族を象徴する王の家紋の白百合をあしらった剣、そしてあの旗を持っていることである。そのためお互いに個人を示す顔は見え、戦場の敵・味方の区別しか分からない。そういう状況で、彼女は聖母マリアに従って、自分の女としての性を捨て、心のある人類でもなく、霊的存在になり切っている。そして、降伏して来てモイギリス人は皆殺

しにすることが彼女に預言された神意と信じている。モントゴメリが故郷に残してきた許婚と愛を持ち出しても、「私はそんな空しい愛など知らずに済むでしょう」(1623)と、彼を殺そうと刃を突きつける。「あなたも心配してくれている御両親が故郷にいるだろう」(1526f.)、自分も両親を悲しませたくないと、モントゴメリが命乞いすると、

ヨハンナ：馬鹿者め！お前が思い出させたのだよ、
この国でどれほど多くの母親が子どもを奪われ、
どれほど多くの子どもたちが父なし子にされ、 1630
どれほど多くの花嫁がやもめにされたことが、全て
お前たちによってだよ。今度はイギリスの母が
絶望を味わい、フランスの妻たちが悲嘆の余り
流した (geweint) 涙を知るがよい。

これまでの彼女の神に対する祈りは他国の侵略から守り、フランス生え抜きの王をお守り下さいであり、聖母マリアの命は女性としての愛を諦め、自らの手で太子を戴冠せよと言うものであったが、ここで初めてイギリスの蛮行と彼女の復讐鬼としての姿が明らかにされ、そして彼女は神の命がイギリス人の皆殺しであり、降伏したモントゴメリも例外にできないと思っているようである。

さて、ヨハンナの台詞にあったあの「涙」(1634)につられ、モントゴメリが「涙を流してくれるものは誰もいない (unbeweint) 異国での死」(1635)を悲しむと、彼女は、

誰がこの異国にお前たちを呼んだ。お前たちがここの畑で
人々の勤労が花咲かせた実りを無為にし、この国の家から
私たちを追い出し、ここの都市の寺院に
戦いの火の玉を投げ込んだのだよ。
お前たちは心に馬鹿げた妄想を抱き、 1640
自由に生まれついたフランス人を奴隷の恥辱に
まみれさせ、この大きな国をボートのように
お前たちが誇る海の船に繋げようと夢見たのだ。
お前たちは馬鹿だ。フランス王の紋章は神の御座に
付いているのだよ。 1645

(中略)

復讐の日が来たのだよ。もはや生きてお前たちは
この海を渡って帰られるなんて、思わない方がよい。
この海は神がお前と私たちの間に国境として 1650

据えられているのに、お前たちは不遜にも越えて来たのだ。

モントゴメリはヨハンナから見れば侵略者であることは確かであるが、指揮する側のトルボトと違ってされる側で、しかも結婚前の若者である。彼の父は大都市を含まない「50 村の領主」(1587) とある所を見ると、貴族でも大ではなく中以下の息子であろう。手柄をたて名声を得、上にのし上がるという妄想に駆られてここに来たことを第 1560-2 詩行で彼は悔いている。この彼に対して、フランスの解放者ヨハンナはイギリスへの復讐者として描かれ、神とそういう「契約」(Vertrag, 1600) を結んだ預言者としてこの戦場にいる。そして、二人の対話はこう続く。

モントゴメリ：ああ、もう駄目か！もう死の残忍な手が俺に迫っている。

ヨハンナ：お前なんか、死ぬ！逃げられない人間の運命なのに、死を

前になぜ怯え、震えているの、私をごらん、ほら、羊飼いの 1655
女の子に生まれ、罪もなく敬虔に、羊を追う棒を振っていた
この手は、剣に触れたこともなかったわ。

でもね、故郷の野原から、お父さんの厚い胸 (Busen) から、
お姉さんたちの優しい胸 (Brust) から引き離され、

ここに居て (muß), 神さまたちの声 (Götterstimme) が急きたてたの、 1660

我欲からじゃないわ、お前たちを辛い目に遭わせねばならないが、
好き好んでじゃなく、恐ろしい妖怪の道を殺戮しながら歩み、

死を振りまき、最後には死の犠牲 (Opfer) にならねばならないの。

だって私は嬉しい帰郷という日を見るつもりもないし (werde),

お前たちの味方を多く殺し、もっと多くのやもめを作るわ、 1665

でもね、最後には私自身が死に、私の運命を全うするの。

1660-3 詩行は強制の意を表す助動詞>muß<に、次の 3 詩行は未来、不確定、希望、決意などの意を表す>werde<に支配されている。啓蒙主義は迷信・迷妄からの人間を解放し、自由にすることを目指したのであって、その完成者と言われているレッシングの「いかなる人間も強制されてはならない」(Kein Mensch muß müssen)⁵ という言葉がそれを良く示していよう。さらにルターの宗教改革から生まれた敬虔主義も、神と主体的に向き合うことを理性だけでなく感情の段階まで広げていたこと、そして前述したように、その影響下にある家庭に育ったシラーがフランスの機械論的唯物論を批判的に受け入れたのも、人間の自由と道徳性を守るためであったことを思い出せば、次の助動詞>werde<の意味も自ずから明らかになる。神々が乙女を強制して戦場に立たせ、最後に犠牲となるよう強いるが、彼女は神々の単なる奴隷でなく、それを主体的・自由意志で受け入れ、自分の運命を全うしようとしている。

ナチオナル版の解説によれば⁶、このモントゴメリとの第7場を、シラーは古代ギリシアの『イーリアス』(Ilias)の第21歌にあるアキレウス(Achilleus)と若いリュカオン(Lykaon)の場を手本に古代のトリメータ(Trimeter)⁷を使用して書いている。そしてさらに、その詩形によりヨハンナはまさに英雄アキレスのように「英雄女」になって、「崇高」の境地にまで達していると解説している。ホメール(Homer, 紀元前800)の古代とシラーの描く中世の場には確かに共通の世界があるが、その解説で述べられていない歌の始まりを聞くと、ゼウスが生んだクサントス川にトロヤ勢が達すると、アキレスは彼らを追いたてた。彼ら是一群となって素早く逃げて行くが、彼らの前に女神ヘーレが暗雲を放つと、その群の半分は渦巻く川の中へと殺到した。つまり雲に視界を遮られ、前に恐ろしく渦巻く流れがあるのも知らず、馬もろとも飛び込んだ訳である。アキレスは霊鬼の如くその中に剣を振りかざし飛び込み、四方八方へと切りまくると、ギャア、ギャアという呻き声が沸き起こり、川の水は赤い血の色で染まって行った。これは前述したラウールの報告にあった乙女ヨハンナの最初の戦果であった「屠殺」(981)によく似ていないだろうか。さてホメールのその続きでは、アキレスが疲れた腕を休めていると、リュカオンが死にたくない一心で彼の膝にすがり、父母のもとから離れ、ここに私を遣わしたのは神であるが、一命だけは助けてくれと命乞いをする。するとアキレスは「馬鹿め、命乞いの無駄口など叩くな。(中略)この俺もいつかは死という運命に見舞われるのだ⁸。こう言われると、リュカオンの膝はワナ・ワナと崩れ、心も萎えて、アキレスの刃に貫かれ、倒れる。こちらはシラーのヨハンナとモントゴメリの場に相似している。こうして見ると、シラーはホメールの叙事詩の第21歌の110詩行までを前後に分け、前半をあのフランスのイオン川の畔での初陣で描き、後半をこの岩山に囲まれた地におけるモントゴメリとの戦いに移していると言えよう。この後半に、古代のアキレスに倣って「最後には私自身が死に、私の運命を全うするの」(1667)という台詞がヨハンナに与えられている。これは神の命により「強制的に」戦場に召されたことに対して、「主体的に」それを受け入れていることを表していると言ったが、彼女の精神状態はその時、シラーの美学論文「崇高について」(Über das Erhabene)で述べられている「崇高」な感情で満たされているのではないだろう⁹。この場での死はモントゴメリに与えられる死であって、ヨハンナのそれではない。なぜならヨハンナは先に引用した1519-23詩行で、ランスでの太子の戴冠までは神により不死身にされていると明言していたからであり、それ故ここで言われている彼女の死はこの場でのそれではなく、神の預言を果たし終えたランス以降のそれであり、ここではそれを予感し始め、それをその時は自主的に受け入れようという決心の表明である。

その他の点でこの場で見逃せないのは、ヨハンナはモントゴメリの声を聞いているだけで、彼の顔は見えていないということである。モントゴメリの方も、「あなたの言うことは恐ろしいが、眼差しは穏やかだ」(1603)という彼の台詞から明らかのように、彼女の眼と鎧姿を近くで見ているが、その顔は見えていない。つまり二人はお互いの顔を見ていないのであって、このことが次の第3幕第10場における彼女とライオネルの場合と大きく違う点である。さて、モントゴメリはこの世のものでない妄想していた乙女が自分と同じ死すべき運命の人間と聞かされ、さらに

女だから勝てるかもしれない、「これで手柄を立てれば」と現世の欲望が頭をもたげて来たため、未来は神まかせにして自分の非力の結果を見ることになり、ヨハンナの「神々」に、モントゴメリの「神」は戦敗する訳である。もちろん彼女の複数の「神々」はジプシーの兜を彼女にもたらした神であり、旧約の神であり、初版本を飾った銅版画の古代ローマの戦いの女神ミネルヴァであり、あの櫂の古代ゲルマンの神、そしてキリストの聖母マリアである。彼女はあの世へ旅立つ彼に、「お前が自分の足でこの死に場に来たのだ さあ行け」(1676)と促し、その死体から離れ、考え込みながら立ち止まり、こう独白を続ける、

崇高なる^{マリア}乙女様、あなたはとんでもない力を私に振るわせるのね。
あなたはこの戦いを好まない腕に武力を授け、
この心を情け容赦ないものにされますのね。
同情の気持ちにこの魂は溶け、手はおののきますの、 1680
まるで神殿の聖所に手を付けるかのように、
花盛りの若き敵の肉体に切り掛ろうと、振り下ろした
抜き身の刀を見ると、身震いがしますの。でも、
その瞬間になると、力が私に湧いて来て、決して的外さないよう、私の震える手を支配し (regiert)、剣が自ら、 1685
まるで生きている霊のように、切り込んで行くのです。

彼女は自己分裂し始めた。刀にはフランス王室の紋章が刻み込まれ、民族的な神から授与されたものである。兜で顔こそ見えないが、自分と同じ若さで故郷に肉親と許婚がいる人間として、そのイギリス人に彼女は同情の気持ちを抱いている。彼女は民族的復讐神の意のままに、戦場でイギリス人と見たら、復讐女のようにすべてその刀の餌食にして来たが、その自分を反省し始めたことを確認し、次の場に進もう。

ブルグントの翻意とフランスの統一

ブルグントがイギリスと同盟し、太子のフランス側に対峙してこの戦場にいるのは、父を殺した犯人デュ・シャテルが太子の側近として向こう側にいるからで、親の仇打ちは子として当然の義務かつ正義で、そして騎士としての誇りであろう。ヨハンナの正義は神が定めた国境を越えてやって来たイギリス軍を殲滅することで、それは神の遣いとしての任務である。ブルグントは敵と同盟しているとはいえ彼女と同じフランス人で、その神は彼女に同国人を殺せとは命じていない。それゆえ乙女は魔女か聖女かという問題と、この戦争でどちらに正義があるのかというそれが、同じコインの表と裏として演じられている。

この戦場の第 9, 10 場でヨハンナはブルグント公と会う。もちろん両者とも鎧を身に着け、面

鎧を下ろしているが、彼の方は振り乱した髪からヨハンナと知り、「魔女め、お前の最後が来たぞ」(1687)と、騎士として彼女に戦いを挑み、彼女の方は彼のイギリス人とは違った作法とブルグントを示す腕章から彼と推察する。そこにデュノワとラ・イールが駆けつけ、彼女に代わって戦おうとするが、ヨハンナはそれを制止し、「フランスの血は流してはなりません。刀でこの争いを決着させてはなりません」(1720f.)と、これは民族間の内戦ではなく解放戦争で、彼には言葉による降服の説得で臨まなければならないと認識させ、ブルグント公には、

あなたの本当の敵は向うにいますわ、ブルグント様、 1730

(中略)

こちらのお方は、あなたと同じフランスの高貴なお方ですよ。 1732

(中略)

あなたの足元で、こうしてお願いしているのは、私たちが
負け、困り果ててではありません。 あちらをご覧ください。 1755

イングランドの陣営は灰燼に帰し、
その死者が地を覆っています。

フランスのラッパが鳴っているのが聞こえるでしょう。

神が裁かれたのです、勝利はこちらにあるのです。

私たちは美しい月桂樹の枝を折って、私たちの 1760

仲間 (Freund) のあなた様と分かち合おうと、用意していますの。

こちらにおいで下さい、高貴な離国人^{ひと}よ、お帰りを！

正義 (Recht) と勝利 (Sieg) がお待ちしている、こちらへどうぞ、

神に遣わされた私が、自ら妹のごとく手を差し伸べ、

あなたをお救いし、私たちの清い (reine) 側へお連れしますわ。 1765

(中略)

ブルグント：偽りのお上手な言葉に絡み取られそうだが、

この女の話し口は子どもようだ。

邪悪な霊がこれに言葉を話させて、

それがこのような純真さ (Unschuld) をも見事にまねるのか。 1775

もう聞きたくない。武器を取れ！

俺の耳は、どうも、腕より弱いようだ。

彼はヨハンナの誠実な説得に、「正義」は自分の方ではなく、彼女の方にあるのではないか、魔女の彼女にこのような「純真さ」が同居できるだろうかと、これまでの確信が揺らぎ始めるが、彼はそれを振り切って、騎士として武力で決着をと彼女にいどむ。これに対して、

ヨハンナ：あなたは私を魔女と呼び、地獄の妖術使いと
思っておられますね 平和を築き、憎しみを
静めることが地獄のすることでしょうか。和合の気持ちが 1780
そんな汚れた溜め池から立ち上ってくるでしょうか。
祖国を求める (um) 戦いは清純 (unschuldig) で、
神聖で、人間にとって善ではないでしょうか。
ものの原理 (Natur) がいつから逆になり、天が
正しい (gerechte) ことを捨て、悪魔がそれを守ることに 1785
なったのでしょうか¹⁰。私の申しておりますことは正しくはありませんか。
天以外のどこから私はそれを知ることができたでしょうか。

「子供のような羊飼いの娘」(1790) に誰がこのように話術を駆使させ、このように色々なことを教えてくれるかとヨハンナが続けると、ブルグントは驚き、感動して彼女を見つめ、

どうしたことだ、俺はどうかしてるのか。神なのか、
俺の胸奥にある心に翻意を促しているのは、神なのだ！ 1800
この女は欺いてない、なんと感動的な姿ではないか！
そうだ、違いない。俺が魔法の力で幻惑されているとしても、
これは天の神の力によるものに違いない。
俺の心はこう呟いている、これは神に遣わされた娘だと。

シラーはブルグントの様子をト書きではなく、その彼を前にしているヨハンナの台詞でこう見事に描いている。

心を動かされたんだわ。必死にお願いしたのは 1805
無駄ではなかった。あの額にあった怒りの雷雲が溶け、
涙の雨となって流れている、平和の光を湛えながら
お気持ちが金色の陽となって、お目から顔をのぞかせているわ。
剣を捨てて 胸と胸を合わせ、抱き合いましょう
泣いていらっしゃる。翻意され、私たちの元に戻られたのだわ。 1810

この直後のト書きには、武器を捨ててブルグント、ヨハンナ、ラ・イールそしてデュノワは抱き合うとある。これで、この公は神が遣わした清純な乙女により中世的な私家中心のブルグントを捨て、フランス民族国家の中の一地方を預かる領主になった。これでフランス人同士の内戦は終わり、民族的統一が達成され、まだランスでの太子の戴冠式とイギリス軍の殲滅が残っている

とはいえ、平和国家再建への大きな一歩を踏み出せることになる。

これで第2幕が下り、次の第3幕へと続く。

未完

【引用・参考文献】

シラーの『オルレアン乙女』からの引用は Schiller, Werke, Nationalausgabe, Weimar, 1948. B. 9. により、その詩行数を本文中に示す。地の文中での引用では「 」の次に（詩行数）で、地の文と分けた数詩行にわたる引用ではその訳の右側に詩行数を付ける。

- 1 宗教裁判ではヨハンナが男装していたことが問題になって、マギスターのボペールは「誰がお前に男の服を着るよう言ったのか」と審問し、彼女はそれに答えることを何回も拒否し、「それで、誰にも迷惑をかけたくない」と応じている。Vgl. Erläuterungen und Dokumente, Friedrich Schiller, Die Jungfrau von Orleans. Reclam. 1992. S. 51.
- 2 この銅板画は次の書籍で見られる。Schiller, Werke, Nationalausgabe, Weimar 1948. B. 9. S. 319. なおミネルヴァは古代ギリシアの学問・芸術・戦いを司る女神アテナーとほぼ同一である。
- 3 Erläuterungen und Dokumente, Friedrich Schiller Die Jungfrau von Orleans Reclam. 1992. S. 35.
- 4 Vgl. ibid. S. 44.
- 5 『賢人ナータン』第1幕第3場でのナータンの台詞。Gotthold Ephraim Lessing: Gesammelte Werke, Aufbau Verl. Berlin und Weimar. 1968. B. 2. S. 339.
- 6 NA. B. 9. S. 430f.
- 7 これは古代ギリシア詩の3韻律 (Metrum, pl.: -ren od. -ra) で、これに倣ったラテンのものがゼナール (Senar) で、これは1詩行6つの強音節 (Hebung) からなる。ドイツ詩ではヤンプス (Jambischer 弱強格)・トリメータとして、ラテンと同じ6つのそれで1詩行となり、弱音節が1つではなく2つになっても許される。もちろんヤンプスであるため詩行末は強音でなければならないが、ツェズール (Zasur, 詩行内の区切り) は古代詩では第3強音節と決まっている。尚、この名称の「トリ」は3の意であるが、6強音節の真中に区切りがあったところから、この韻律名になったが、ドイツ詩では自由である。
- 8 この引用の前半は第99、後半は110詩行で、この出典は：Homer: Ilias. Verdeutsch von Thassilo von Scheffer. Dieterich'sche Verlagsbuchhandlung zu Leipzig, 1938. S. 490f.
- 9 この私の見解とは逆に、ナチオナル版はこの1552詩行以降のモンゴメリとヨハンナのやり取りに注をつけ、B. 9. S. 430でこう書いている。「この場にある古代的なパトスを胸にヨハンナは全く完全に近代的でシラー的な仕方であらう崇高なものの中へと (ins Erhabene) 上昇させられ、既にほとんど肉体から遊離してしまった霊 (Geist) は同情 (Mitleid) とか愛 (Liebe) の呼びなど耳に入らず、彼女の内なる神々 (Götterstimme) の声だけに従っている」。しかし、シラーの「崇高」は、まだ余裕のある「美」(das Schöne) の状況と違って、例えば死のような極限状況になった時、そのような自然的・外的な強制から自己の尊厳と自由を守るために誘ってくれるものである (Vgl. NA. B. 21. S. 50f.)。
- 10 ヨハンナはイエズスに倣って、彼女を地獄の魔女と妄想しているブルグントの誤解を解こうとしている。例えば「ルカによる福音書」第11章第14-23節で、イエズスが唾から悪魔を追いだし、話せるようにすると、「彼は悪魔の頭、ベエルツブーブによって悪魔を追いだす」と言う者があった。彼はそれに対して、そうであるとすると、矛盾が生ずるという論法で反論している。例えこそ違え彼女も同じ論法で、「そんな汚れた溜め池」(1781)の詩行の意味は、そこから飛び出て来るのは悪魔の頭ベエルツブーブ (Beelzebub, 肥溜の神) であって、和合 (Eintracht) の気持ちではない、ということである。